

原 著

授業研究を通して若手教師が感じる熟練教師との差

—若手教師の職能成長を支援するシステムの開発に向けての基礎調査—

笠井 俊信 (岡山大学教育学部) 鈴木 真理子 (滋賀大学) 永田 智子 (兵庫教育大学)
西森 年寿 (東京大学) 望月 俊男 (東京大学) 中原 淳 (東京大学)

教師の職能の成長は今も昔も変わらず国の重要な課題の1つとなっている。これまで教師の職能成長に重要な役割を果たしてきたものの1つが授業研究であると言えるが、近年は教師の多忙さなどの理由で実施されにくくなっているのが現状である。このことから、筆者らは空間的・時間的制約を部分的に解消可能なネットワークを活用した Web ベースの授業研究支援「eLESSER」プログラムを開発・実施した。2005年度に実施したこのプログラムには4人の教師が参加した。このうち2人は教職経験15年以上の熟練教師であり、プログラムのプロセスで授業設計、実施、授業についての議論を行った。残りの2人は教職経験10年未満の若手教師で、2人の熟練教師による活動を Web 上で観察した。本稿では、この eLESSER プログラムを通して若手教師が感じた熟練教師との職能差について調査・分析した結果について報告し、若手教師の職能成長を支援するシステム開発への指針を示す。

キーワード：授業研究, 教師の職能, Web ベースシステム, 若手教師, 職能成長支援

I. はじめに

一般的に、熟練教師と言われる教職経験の長い教師と、就職したばかりの初任教师には授業過程における思考に大きな差があることが分かっている¹⁾。そのため、教師としての十分な職能を身に付けていない現職教師が、熟練教師との差を埋めていくことが今も昔も変わらぬ重要な課題の1つとなっている。しかし、この教師としての職能差は、一朝一夕に埋まるわけではなく、また、単に教職経験を重ねていくことで自然と確実に埋まっていくわけでもなく、自らの実践や熟練教師の実践の省察と反省を通して可能となるとされている²⁾。日本では、若手教師がそのような経験をするための貴重な機会として授業研究が行われてきた。しかし、近年では教師が校務などで年々多忙化していることもあり、空間的・時間的制約が大きく授業研究を含む授業に関する学習機会は減少の傾向にある³⁾。このため、若手教師が熟練教師の授業を観察することや、特にその授業の中での熟練教師の思考について聞くことが困難になっているのが現状である。

このような問題に対して、筆者らは空間的・時間的制約を部分的に解消することを目指した Web 環境による授業研究支援「eLESSER(LESSon Study practitionerER)」プログラムを開発・実施した⁴⁾。

eLESSER プログラムでは、授業についての深く細かい議論と観察という参加形態の保障も目的としており、そのための機能がすべて Web 上で利用可能となっている。この eLESSER プログラムの実施に参加した熟練教師へのインタビュー調査の結果、このプログラムの有効性が示されており⁴⁾、多忙化している現職教員の授業研究活動を促進させることが可能であると考えている。

さらに、eLESSER プログラムでのすべての活動が電子化され保存されることを利用し、実際に授業研究に参加しなくても、過去の eLESSER プログラムでの活動記録を利用したシステムの開発を構想している。そのために本稿では、実際の eLESSER プログラムに観察形態で参加した若手教師が、熟練教師による eLESSER プログラムにおける活動を通して感じた職能差を調査・分析する。この結果を通して、若手教師の職能成長支援として eLESSER プログラムでの活動記録をどのように利用すべきかについて考察する。

II. eLESSER プログラムの概要

本章では eLESSER プログラムの概要について述べる。eLESSER プログラムでは、参加者の空間的・時間的制約を解消させるために、授業の実施以外のす

すべての活動を Web 上で実現できるようになっている。そのため、電子掲示板とテレビ会議システムを併用した形態となっている。以下、eLESSER プログラムの構成、各活動ステップの概要について述べる。eLESSER プログラムの 1 サイクルは、表 1 に示されるように授業研究にかかる 8 つの活動ステップから構成される。

表 1 eLESSER プログラムの構成

活動ステップ	具体的活動内容
1. 問題の明確化に向けて	テレビ会議で問題の明確化
2. 学習指導案の立案に向けて	指導案 1 のアップ
	指導案 1 へのコメント
	テレビ会議で指導案 1 の検討
3. 授業 A の演じに向けて	指導案 2 のアップ
	授業 A の演じ
	授業 A のビデオアップ
4. 授業評価とその効果の反省	授業 A 視聴とコメント
5. 授業の改訂に向けて	テレビ会議で授業 A の検討
6. 授業 B の演じに向けて	指導案 3 のアップ
	授業 B の演じ
	授業 B のビデオアップ
7. 再度の授業評価と反省に向けて	授業 B 視聴とコメント
	テレビ会議で授業 B の検討
8. 結果の共有に向けて	指導案 4 のアップ

「1. 問題の明確化」では、Adobe 社の Breeze をテ

レビ会議システムとして利用し(図 1 左下画面参照)、教師らとそのサイクルで追求する目標について議論し決定する。

「2. 学習指導案の立案に向けて」では、まず授業を行う教師がたたき台となる学習指導案 1 を Web 上にアップする。その学習指導案に対して、授業を行わない別の教師が気づいた点をコメントする(図 1 上部画面参照)。そのコメントを元にして、テレビ会議を利用して学習指導案の詳細について検討をする。

「3. 授業 A の演じに向けて」では、授業を行う教師が 2. のテレビ会議での検討を踏まえて修正した学習指導案 2 を Web 上にアップした上で、この学習指導案に基づいて授業 A を実際に行う。さらに、その授業 A のビデオ映像が Web 上にアップされる(図 1 右下画面参照)。

「4. 授業評価とその効果の反省」「5. 授業の改訂」では、授業を行っていない教師がアップされた授業ビデオを見て指導案ページにコメントを書き込む。その上で、教師らはテレビ会議で授業 A の反省と改善策について協議する。

「6. 授業の演じに向けて」では、改善された授業 B について 3. のステップと同様の活動を行い、「7. 再度の授業評価と反省に向けて」では、授業 B について 4. 5. と同様の活動を行う。

最後に、「8. 結果の共有に向けて」において 7. のテレビ会議での協議を踏まえて、最終結果としての学習指導案 4 を Web 上にアップする。

以上が eLESSER プログラムの 1 サイクルの活動の

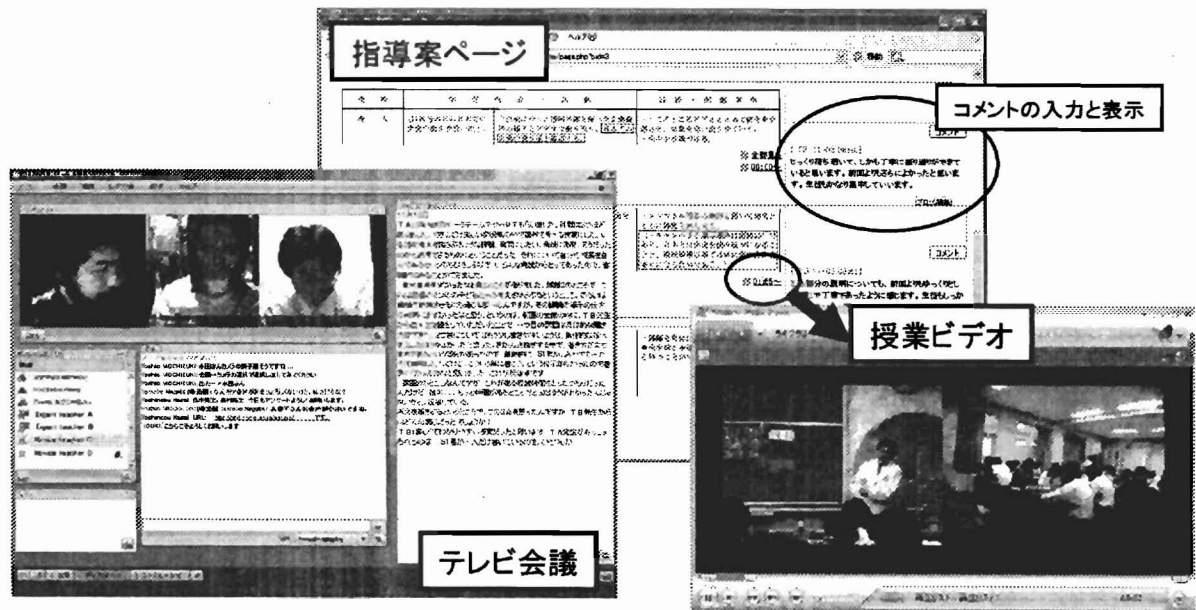


図 1 eLESSER プログラムにおける活動画面

概要である。2005年10月から11月にかけて、このeLESSERプログラムを2サイクル実施した⁴⁾。参加者は4人の現職教師であり、そのうち2名は教職経験15年以上で教員養成系大学院において修士号を取得している熟練教師であった。他の2名は教職経験が10年未満の若手教師であった。eLESSERプログラムの2サイクルのそれぞれにおいて、2名の熟練教師が授業を担当し、学習指導案などへのコメントやテレビ会議システムでの協議などもこの2名の熟練教師の間で行われた。2名の若手教師は、eLESSERプログラムでの熟練教師による活動を観察するという形態で参加した。その中で、2名の若手教師に対してeLESSERプログラムでの熟練教師の各活動の中で、どのような点で機能差を感じるかについて調査した。次章で調査の方法と結果について述べる。

Ⅲ. 調査の方法と結果

1. 調査の目的

本章では、授業研究を通して若手教師が感じる熟練教師との機能の差についての調査について述べるが、まず、調査の目的について明確にしておく。

就職直後の初任教师と熟練教師との機能差については、佐藤らによって調査された結果がすでに報告されている¹⁾。この報告では、熟練教師と初任教师に授業ビデオを見せ、その過程で感じたことをリアルタイムで発話させることで(VTR再生法)、授業過程における思考を抽出・比較し、次の5つの観点で明確な差が存在することを示している。

- ・即興的思考
様々な状況に即対応できること
- ・状況的思考
授業ビデオを見る際に、実際に授業の中にいるように判断できる
- ・多元的思考
一つの事象を教授、学習の両方の立場から認識できる
- ・文脈化された思考
事実だけでなく、その原因や次の展開への影響について考えられる
- ・思考の再構成
一つの考えに固執せずに状況に応じて見方や考え方を換えられる

本研究での調査の目的をこの調査結果と比較させて明確にする。本研究の目的は授業研究での様々な活動の中で、若手教師が“感じる”熟練教師との

思考の差を調査することである。上述した調査研究との違いは、まず、就職直後の初任教师ではなく、ある程度経験している若手教師が対象である点である。これは、本研究で構想している職能成長支援システムの対象は初任教师だけではなく、より広い熟練に至っていない教師を対象としているからである。また、上述調査では双方の思考を比較して分析しているため、初任教师が気づかない差も抽出されている。本研究では、若手教師が気づいた差のみを対象としている点で異なる。もちろん本人が気づかない差も重要ではあるが、職能成長支援の観点で考えた場合、本人が気づける差の方がより学習しやすいと考えられるため、支援システムではその違いを考慮することが望ましいと考えられるからである。

以上の点を踏まえ、本研究ではeLESSERプログラムにおける熟練教師による授業研究活動において若手教師が感じる差について調査することを目的とする。

2. 調査の方法

上述した目的に対して、本研究では以下の2つのタイミングで調査を行った。

- ・活動ステップ2, 4, 5, 7における学習指導案、授業ビデオに関するテレビ会議システムによる検討時

- ・eLESSERプログラム終了後

以下でそれぞれについて詳細に述べる。

①テレビ会議システムによる検討時の調査方法

eLESSERプログラムの活動ステップ2, 4, 5, 7(表1参照)では、学習指導案、授業ビデオに対して授業を行わない教師が気づいた点をコメントし、そのコメントを元にテレビ会議システムで検討が行われる。このテレビ会議には2名の若手教師も観察という形態で参加しそのやり取りを聞いている。その際に、書き込まれたコメントごとにテレビ会議での検討も含めて感じた感想を、テレビ会議中に指導案ページ(図1の上部画面参照)から入力してもらった。その際の入力画面と具体的な質問項目を図2に示す。

図2に示される画面において、若手教師は書き込まれたコメントごとに、Q1~Q4までの内容に当てはまると感じた場合にはチェックを入れることができる。その際、複数の項目にチェックを入れることも可能である。さらに、Q4に当てはまる場合には具体的にどのような点に関して、“自分ではここまで深くは考えない”と感じたかを自由記述で入力してもら

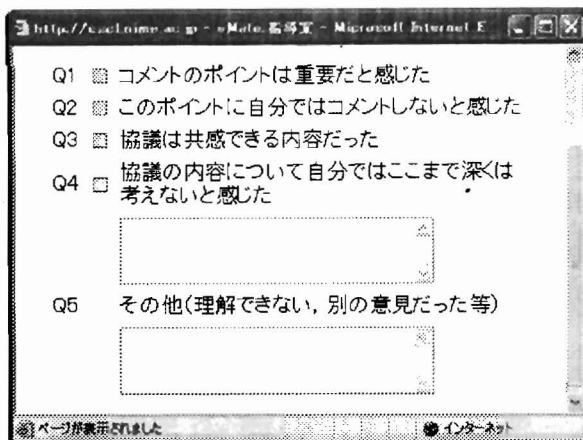


図2 コメントに関する感想入力画面

った。また、Q5としてその他感じたことがあれば自由に記述してもらうようにした。

この方法で調査の目的は、まず、学習指導案や授業ビデオを見たときの着眼点と、授業について検討する際の思考について若手教師が熟練教師との差を感じるかどうかを調査することであった。

②eLESSERプログラム終了後の調査方法

2サイクルのeLESSERプログラム終了直後に、プログラムでの活動全体を通して熟練教師に感じた職能差についてアンケート調査を行った。eLESSERプログラムでのすべての活動の記録はWeb上に残っており、それを参照可能であることを伝え、活動を思い出しながらアンケートに答えてもらった。アンケート調査の項目は4つの観点から2種類の視点ごとに感じた差について選択形式と自由記述で答えてもらった。まず4つの観点は以下のとおりである。

- ・観点1：授業における教師としての意図
- ・観点2：教師としての授業での振る舞い
- ・観点3：授業で生徒に行わせた学習活動
- ・観点4：授業での教師としての生徒への対応

この4つの観点の選択と分類については、上述した佐藤らによる調査研究を参考にし、最も多元的に考える必要があり先の展開も考慮しなければならないポイントを観点1とし、観点4にかけて順に多元的・先の展開を考える必要がないポイントとして整理した。つまり、観点1について若手教師がより差を感じると仮説を立てることができる。例えば、観点1の授業設計における教師の意図は、教授と学習の両方について考えることも必要であり、また、授業全体の展開を考慮することも求められる。それに対して観点4の教師としての生徒への対応は、先の展開をそれほど考慮する必要がないため、職能の差

は比較的生じにくいと考えた。

さらに、それぞれの観点において次の2種類の視点を設定した。

・視点1：局所的視点

授業全体のねらいとは直接関係のない「授業過程」の各場面での視点。授業を実際に見ないとよく分からない視点。

・視点2：大局的視点

授業全体を通して考える視点で、授業を実際に見なくても学習指導案を見れば分かる視点。

この2つの視点についても、佐藤らの調査研究を参考にしている。視点1は授業における実際の具体的な状況に応じて対応しなければならず、即興的思考や思考の再構成などが求められるため、より職能差が生じやすいと考えた。ここで、観点4については、観点自身が授業での具体的な生徒への対応であるため、視点2は設定せずに視点1についてののみ答えてもらった。

上述した4つの観点それぞれに対して2種類の視点から感じたこと職能差の程度を、次の項目から1つを選択してもらった。

- a：大きな差を感じ、内容的にも身に付けていくのは困難だ
- b：大きな差を感じたが、内容的には少しずつでも身に付けていけそう
- c：ある程度の差を感じ、内容的にも簡単には身に付けられない
- d：ある程度の差を感じたが、内容的には意識すれば身に付けられそう
- e：あまり差を感じなかった

また、それぞれの視点に対して2サイクルのeLESSERプログラムの活動の中で具体的にどの場面でどのような点で差を感じたかを自由記述で答えてもらった。

3. 調査の結果と考察

上記2つの方法で調査した結果についてそれぞれ詳細に述べる。

①テレビ会議システムによる検討時の調査結果

2サイクルのeLESSERプログラムでの活動の中で、2名の熟練教師によって学習指導案へ書き込まれたコメントは全部で92個あった（「特にありません」などのコメントでテレビ会議でも検討されなかったコメントは除外）。これらのコメントに対して、2名の若手教師から図2で示した画面から126個の感想

が入力された。これらの全感想の Q1～Q4 の項目の選択数とその割合を表 2 に示す。

表 2 熟練教師のコメント・協議に対する感想

項目	Q1	Q2	Q3	Q4
項目内容	ポイント重要	ポイントしない	協議共感	協議考えない
選択数(割合)	67 (53.2%)	5 (4.0%)	116 (92.1%)	27 (21.4%)

この結果からコメントのポイント、つまり学習指導案に着目するポイントについては、若手教師は熟練教師にあまり差を感じていないことが分かった。しかし、そのコメントの協議の中身についてはほぼすべてに共感し、20%を超える協議に「自分ではここまで深く考えない」と答えた。このうち、25 件にどのような点について「ここまで深く考えない」かについての具体的な記述があった。佐藤らの調査研究で抽出された 5 つの思考を踏まえながら、これらの記述を機能的に分類したところ、次の 5 つの内容に分類することができた。

・多元的思考

佐藤らによる「多元的思考」と同じで、教師の行動、教具の選択、生徒にさせる行動などの判断に生徒の学習効果についてしっかりと考慮している、という内容が中心。

・文脈化された思考

佐藤らによる「文脈化された思考」と同じで、次の展開を予想した上での教師の行動についての内容。

・生徒への対応

佐藤らの「即興的思考」と「状況的思考」の両方に関係した内容で、授業中の具体的な場面での状況を考えた生徒への瞬間的な対応についての内容。

・深い意図

佐藤らの調査結果には抽出されていない分類。教師による様々な意図や思考が奥深い、という思考の質の高さについての内容。

・高度な戦略・技術

佐藤らの調査研究では抽出されていない分類。教師による教授戦略や様々な状況での対応の仕方など、技術の高さについての内容。

これらの 5 つの内容点それぞれに含まれる若手教師の記述の件数と典型的な記述を表 3 に示す。ここで、記述内容の分類の考え方について述べておく。分類は記述内容の中で“何に差を感じたか”を重視して分類した。例えば、「深い意図」の具体的な記述と『気の毒な間違いを省く』という目的について書かれているが、内容としては教師の立場と生徒の立場の両方から考慮した記述で多元的思考に含まれるが、若手教師は教師の意図そのものの質に差を感じており、そのことを踏まえて多元的思考ではなく「深い意図」として分類している。

また、「深い意図」「高度な戦略・技術」について佐藤らの調査研究で抽出されていないことについて考察しておく。佐藤らの調査では、授業過程における思考を熟練教師と初任教师とで比較しているが、その方法は客観的に数値化して比較しており、思考

表 3 テレビ会議時に若手教師が感じた「ここまで深く考えない」内容の分類とその記述

「多元的思考」 15 件
<ul style="list-style-type: none"> ・地図を使うのと地球儀を使うのでは生徒の理解の仕方が違うことがわかった。かなり参考になった。 ・ひとつの単元を見通して、教材の選定をしていくことが、子どもの理解へ深い影響を与えることを改めて感じた。 ・いろいろな切り口から単元を考え、授業を構成していくことで、よりよい授業が出来上がっていくと感じました。
「文脈化された思考」 1 件
<ul style="list-style-type: none"> ・たしかにこの課題についてしっかりと理解していないと、次の課題はさっぱりになる。だから答えを示すのだな。
「生徒への対応」 2 件
<ul style="list-style-type: none"> ・遅れてくる生徒への対応が全体の雰囲気を作るうえで大切なんですね。当たり前のことですが、再確認しました。
「深い意図」 2 件
<ul style="list-style-type: none"> ・「気の毒な間違いを省く」という目的があるのはすごい。
「高度な戦略・技術」 5 件
<ul style="list-style-type: none"> ・分子のモデルを使うことで、その後の予想が科学的に行えるので、納得しました。 ・何気ないところに、ヒントを隠す〇〇先生の方法がすばらしかったです。

の質的な深さや技術の高さなどは比較していない。本研究の調査では、若手教師が主観的に判断しており、その結果抽出された新しい職能差の内容であると考えている。逆に佐藤らの調査研究で抽出された項目のうち、「思考の再構成」に当たる内容が出てこなかった点については、この調査の方法が学習指導案に書き込まれたコメントごとに感想を回答する形態であるためだと考えられる。つまり、学習指導案に対する思考の全体の流れについては考えにくい形態だったと考えられる。

最後に、この調査での回答の選択肢の1つだったQ5：その他に対する記述について述べる。Q5に対する記述は18件あり、その内容は次の5つに分類することができる。

- ・感想 5件
- ・自分なりの結論 4件
- ・違う意見や疑問点 5件
- ・自分の課題の発見 3件
- ・生徒の反応への驚き 1件

これらの記述の中に、この質問項目で本来期待していた自由な観点での熟練教師との差についての記述は存在しなかった。しかし、「自分の課題の発見」についての記述には大きな意味がある。この記述の例を挙げると、『こんなにも机間支援中にヒントを出さなくてもいいんだな。自分だったらヒントを出しすぎそうだ。』という記述である。これらの記述が示すのは、eLESSERプログラムに観察形態で参加するだけでも自然と教師としての自分への内省が生じ、職能成長のきっかけとなっていることである。このことは、本研究で構想しているeLESSERプログラムでの活動の記録を利用した、若手教師に対する職能成長支援システムの可能性を裏付けていると考えることができる。

②eLESSERプログラム終了後の調査結果

2サイクルのeLESSERプログラム終了直後に行ったアンケート調査について、2.の調査方法で述べた4つの観点における2種類の視点ごとに、その結果について述べる。まず、すべての観点・視点についての2名の若手教師が感じた職能差の程度に関する選択形式での質問に対する回答結果を表4に示す。

被験者が2名での調査であるため、この結果から確実なことは言えないが、概ね調査方法で述べた仮説の傾向があると言うことができる。つまり、観点で考えると観点1についてより大きな差を感じ、視点では視点1についてより大きな差を感じる傾向が

あると言える。また、回答の中で唯一“簡単には身に付けられない”が含まれた観点1の視点2については、佐藤らの調査で抽出された多元的思考、文脈化された思考だけではなく、①で述べた本研究で抽出された深い意図、高度な戦略・技術も関係しており、職能成長の支援という立場からはより難しい観点・視点であると言える。

表4 各観点での若手教師が感じる職能差の程度

観点1：授業における教師としての意図 視点1：局所的視点 若手教師A b. (大きな差, 身に付けられそう) 若手教師B b. (大きな差, 身に付けられそう)
観点2：大局的視点 若手教師A c. (ある程度の差, 身に付けられない) 若手教師B b. (大きな差, 身に付けられそう)
観点2：教師としての授業での振る舞い 視点1：局所的視点 若手教師A b. (大きな差, 身に付けられそう) 若手教師B b. (大きな差, 身に付けられそう)
観点2：大局的視点 若手教師A d. (ある程度の差, 身に付けられそう) 若手教師B b. (大きな差, 身に付けられそう)
観点3：授業で生徒に行かせた学習活動 視点1：局所的視点 若手教師A d. (ある程度の差, 身に付けられそう) 若手教師B b. (大きな差, 身に付けられそう)
観点2：大局的視点 若手教師A d. (ある程度の差, 身に付けられそう) 若手教師B e. (あまり差を感じなかった)
観点4：授業での教師としての生徒への対応 視点1：局所的視点 若手教師A d. (ある程度の差, 身に付けられそう) 若手教師B b. (大きな差, 身に付けられそう)

ここで1つの仮説を立てることができる。4つの観点で観点1だけ他の観点と異なっているのは、観点1のみが基本的に暗黙的な内容であり、その他の観点は明示化される内容であることである。このことを踏まえて上述の結果を判断すると、暗黙的である教師の意図は局所的な意図よりも大局的な意図の

方が文脈化された思考や授業全体に関わる戦略など多くのことを考慮する必要があり、より高度な職能が要求される。これに対して、観点2~4は学習指導案においても授業ビデオにおいても明示化される内容であり、より曖昧さが許される大局的な視点よりも様々な具体的な状況に対する即興的思考が求められる局所的な視点の方が高度であると考えられる。今回の調査ではこれはあくまでも仮説であり、今後更なる調査が必要であろう。

次に、それぞれの観点・視点について自由記述で書かれた具体的な場面と内容についていくつかの記述を表5に示す。

表5に示した記述例の中にも多く現れているように、eLESSERプログラムにおける熟練教師の活動を観察し続けた中で、単に職能差を感じるだけではなく、教師としての自分自身への反省や課題につなげている。例えば、観点2・視点1では、『どうしても、自分で授業をするときには意見が出ないと待てずに指名してしまうことが多いので見習いたいと思った。』という記述があった。すべての若手教師が熟練教師の授業研究活動を観察することだけで、このような自らの課題に気付くことができるかは分からないが、自ら授業研究に参加しなくても、熟練教師による授業研究活動を観察することで職能成長のために多くのことを得られる可能性があると言える。

次章では、本章で述べた調査結果を元に、eLESSERでの活動記録を活用したどのような機能・形態が若手教師の職能成長を効果的に支援できるのかについて考察する。

IV. 職能成長支援システム開発への指針

本章では、前章で述べた調査結果を元に職能支援システムについての指針を述べるが、まず、調査結果の結論について確認しておく。まず、前章3.①では、若手教師がテレビ会議での熟練教師の協議の中で感じた差の内容を、多元的思考、文脈化された思考、生徒への対応、深い意図、高度な戦略・技術に分類した。また、前章3.②では熟練教師によるeLESSERプログラムでの活動の中で若手教師が感じた職能差の程度は、観点としては教師の意図についてより大きな差を感じる傾向があり、視点は暗黙的な教師の意図については大局的な視点でより差を感じ、その他の明示化できる観点では局所的な視点でより差を感じるという仮説を立てた。

この結果を元にした職能成長支援システムの基

本的な考え方は、内容的に大きく2つに分け、1つは学習指導案の抽象的なレベルで大局的な視点を中心に教師の意図を主に対象とした支援にし、もう1つは授業ビデオの具体的なレベルで局所的な視点を中心に教師の振る舞い、生徒の学習活動、生徒への対応を具体的に見せることを主な目的とした支援という構成にすることである。それぞれの考え方について述べる。

学習指導案レベルの支援の基本的な方針は、教師の意図を効果的に学習者である若手教師に示すことである。これは、前章での調査結果に基づいていることでもあり、授業研究のよさの一つである本来暗黙的である教師の意図が表出されることを重視したことでもある。この教師の意図は、eLESSERプログラムで記録されている活動の中ではテレビ会議の協議に含まれている。また、このテレビ会議での内容については、本稿で示した5つの分類の中で、多元的思考と文脈化された思考についてはその思考を意識させるようにすることが重要であると考えられる。これは、その他の内容と違い“意識する”ことで改善できることであり、自然とできるようになることが職能成長につながると考えられるからである。

授業ビデオレベルの支援の基本的な方針は、前半での学習指導案を中心とした抽象度の高い内容を具体的な実践で再確認させることと、様々な場面での教師と生徒の具体的なやり取りを見せることである。学習指導案と関連付けながら授業ビデオを見せること以外は特に工夫は必要ないと考えている。

また、両方の支援において共通の方針として、学習者に考えを記述させることである。漠然と感じる熟練教師との差や自らの課題について記述という形で表出させることができ、これらの具体化・明確化につながると考えられるからである。しかしこれらの指針には、まだまだ問題点も多いと考えられる。例えば、各段階で学習者に様々な記述を求めているが、これらの記述は自分の考えを明示化させることが目的であり、この支援システムにおいて何かに利用されるわけではない。目的を明記したとしても、自学自習のプロセスにおいて他人が見ることのない記述をこれほど多くさせることは困難であるように感じる。これらの記述を支援システムの中で何かに利用できる形態を考えることが必要であろう。この点も含めて今後も様々な観点から検討をしながら、システムの実現を目指して調査・研究を進めていきたい。

表5 各観点・各視点について若手教師が感じた職能差の具体的場面・内容の記述

<p>観点1：授業における教師としての意図</p> <p>視点1：局所的視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平面地図と球体の地図のどちらが授業にふさわしいか考えていたところ。〇〇先生は生徒の考えを揺さぶるためにとても深く考えているのだなと感じた。 ・意見交流は学習内容の定着に効果的である。そのために「あんどろ君」をあんな斬新な方法で使用して意見交流させるのはすごい。××先生が意見交流にこだわりを持っている様子が分かった。
<p>視点2：大局的視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お二人の先生ともに言えることですが、指導案を見ると本当に1時間でできるのかという内容が組み込まれている。しかしビデオで見るとすっきりと1時間におさまっている。そのために必要なメディア教材や実験器具の準備が、本当に入念にされていたと思う。 ・天体の分野についての考察が深い。「主題」に小学校での学習内容やそのねらいについて書かれていた。また、中学校指導要領にも触れて、何をどのように教えるべきなのか書かれていた。ひとつの単元についてここまでねらいと目的を持って授業するのは本当にすごいと思う。
<p>観点2：教師としての授業での振る舞い</p> <p>視点1：局所的視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・××先生の説明の仕方が大変うまいと感じた。比喻法は私たちもよく使う説明方法ではあるが、自分をうまく例にとって分かりやすく面白く説明してあげることで、生徒の理解も深まるし、また、教師を身近に感じることもできると思う。さらに授業の雰囲気も少し和やかになり、その後の実験が進めやすそうだった。 ・〇〇先生が生徒に分かったことを問う場面で、発問に対して生徒が瞬時に挙手をしなくても、決して慌てず「待つ」という行動をされたことに感心した。どうしても、自分で授業をするときには意見が出ないと待てずに指名してしまうことが多いので見習いたいと思った。
<p>視点2：大局的視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必ず1時間の授業に一つ以上の素材か実験かメディアがあるだろうと思った。1時間の授業にかけるこだわりがすごい。 ・「教師がしっかり教える」という授業者と学習者の立場の違いが明らかでいいと思う。××先生は「もっと楽しく授業したいが、生徒が怖い先生と思っているようです。」と言っていたが、僕は「教師はしっかり教える。生徒はしっかり聞く」という形は大切なことだと思う。
<p>観点3：授業で生徒に行わせた学習活動</p> <p>視点1：局所的視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒に課題を出して、ひたすら生徒が予想する授業はすごいと思う。その間、〇〇先生はほとんど話をしていない。それで生徒が最後まで意欲的に取り組むのは日ごろの授業のたまものだ。 ・××先生が結果を考えさせたり、予想をさせたりするときに、原子モデルで考えさせておられたことが大変素晴らしいことであると思った。
<p>視点2：大局的視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・〇〇先生のノート作り、××先生のワークシートはともに持ち味がありよかったと思う。自分にも「自分らしさ」が出せるといいと思った。 ・生徒実験を教師が全部準備するのは結構大変なこと。だから僕は生徒にさせるが、今回は分刻みの時間確保が狙いだから仕方ないかな。そこまでしても、時間を確保するこだわりはすごい。
<p>観点4：授業での教師としての生徒への対応</p> <p>視点1：局所的視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机間支援などで生徒に質問されたときに、どこまで答えるのかをよく悩む。生徒を見ているとたくさん教えてあげたいので……。参考になった ・遅れた生徒に対し、どのような指導が適切なのだろう。1. 何も無かったように着席させる、2. やさしく授業に参加させる、3. しかる、××先生は優しく授業に参加させた。このような接し方が生徒との信頼関係を築く上で大切だなと思った。

V. おわりに

本稿では、Web ベースで空間的・時間的制約の部分解消を目的として開発された授業研究支援「eLESSER」プログラムでの活動を通して調査した、若手教師が感じる熟練教師との差について報告した。また、この調査結果を元に現在構想中である職能成長支援システムの開発への指針について述べた。今後この支援システムの実現に向けて更なる調査・研究を進めていきたい。

[付記]

本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（課題番号：17011042，代表：鈴木真理子）と若手研究（B）（課題番号：18700646，代表：永田智子）の助成を受けている。

[謝辞]

本研究にご協力くださったS県内の国公立中学校

に勤務する4人の先生方に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 佐藤学, 岩川直樹, 秋田喜代美: 教師の実践的思考様式に関する研究(1): 熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に, 東京大学教育学部紀要, 第30巻, pp.177-198, 1991
- 2) Donald A. Schon: The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action, Basic Books Published, 1983
- 3) 鈴木真理子, 永田智子: ネットワーク環境におけるレッスン・スタディ構想, 滋賀大学教育学部紀要 I: 教育科学, 55, pp.135-141, 2005
- 4) 鈴木真理子, 永田智子, 西森年寿, 望月俊男, 笠井俊信, 中原淳: Web ベース授業研究支援「eLESSER」プログラムの開発, 日本教育工学会論文誌, Vol.30, 2006 (印刷中)

Title : A Difference in Professional Ability that Young Teachers Feel from Skilled Teachers through Lesson Study -Basic Investigation Toward Development of a System that Supports Young Teachers for Enhancement of Professional Ability-

Toshinobu KASAI (Faculty of Education, Okayama University)

Mariko SUZUKI (Shiga University)

Tomoko NAGATA (Hyogo University of Teacher Education)

Toshihisa NISHIMORI (Tokyo University)

Toshio MOCHIZUKI (Tokyo University)

Jun NAKAHARA (Tokyo University)

Keywords: Lesson Study, Professional Ability, Web-based System, Young Teacher, Teacher Education
